様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月１０日現在

研究種目：特定領域研究
研究期間：2005～2009
課題番号：17083037
研究課題名（和文）　中国科挙制度からみた寧波士人社会の形成と展開

研究課題名（英文）　Formation and Development of the Elite Society in Ningbo from the Perspective of Civil Service Examination System in China

研究代表者
近藤　一成（KONDO KAZUNARI）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：90139501

研究成果の概要（和文）：寧波地域を主な対象とし、時代を宋・元・明に限定して、科挙をキーワードに地域における士人社会の構造の通時的解明を行った。その結果、北宋が科挙制度の確立と士人社会の形成期、南宋が科挙社会と士人社会の成熟期であり、士人社会が自らの来歴の物語を作り出したことが明らかとなった。次の元代は科挙制度が消失したにもかかわらず士人社会は継続し、南宋士人社会の文化伝統を書籍の刊行などによって後世に伝え、科挙が復活した明代は士人社会の爛熟期であり、それらは、北宋の豊稷から明の豊坊に至る豊氏の歴史が雄弁に物語る。

研究成果の概要（英文）：Having “civil service examination” as our key word, we will draw our attention to the Ningbo area and attempt to reveal the structure of the elite society through the Song, Yuan and Ming periods. The conclusions are as follows. The Northern Song was the time of the establishment of civil service examination system and formation of civil service examination society. The Southern Song was the time of the mature of civil service examination society and regional elite society. The elite society of Mingzhou needed a narrative of own history with own growth. Although the Yuan government abolished the civil service examination, the Mingzhou regional elite society continued and the works of Shi-da-fu in Mingzhou were published as the cultural heritage. The revival of civil service examination system made full mature of the civil- service examination society at Mingzhou district during Ming period. The Feng family especially Fengfang was the representative example of the traditional Shi-da-fu culture in Ningbo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	4,500,000	0	4,500,000
2006 年度	6,200,000	0	6,200,000
2007 年度	6,100,000	0	6,100,000
2008 年度	5,900,000	0	5,900,000
2009 年度	4,700,000	0	4,700,000
総　計	27,400,000	0	27,400,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：東洋史　科挙　寧波　四明　士人　墓誌　カルルク　登科録

１．研究開始当初の背景

前近代王朝時代の中国は、統治階層の士と被統治階層の庶に二分されていた。科挙制度が整備された 11 世紀以降の中国王朝は、この士庶の区別を科挙とのかかわりで行うようになる。こうして科挙合格者、応募者、応募準備者、応募能力ありと判断される者までを含む士人社会が地域エリート階層として形成された。しかし士人社会の形成には時間差があり、またその地域的特色の差異も問題となる。現在、広大で多様な前近代中国社会を、多元重層的に理解しようという傾向が顕著であり、そのためにはどのような視角から中国社会の特質を分析すればよいのかという中国史研究の動向を本課題は背景としている。

２．研究の目的

寧波（宋の明州慶元府、元の慶元路）は、浙東沿海地域に位置し、江南や浙西に比べれば後発の新興開発地という特色をもつ。この地域における士人社会の形成と展開を通時的に考察し、そこで形成された士人文化の特質を明らかにする。これによって日本が受け入れた中国文化が、時代を 10 世紀から 16 世紀に限定すれば、ほぼ寧波経由に限定された結果、それは寧波士人社会経由と同義となり、鎌倉期以降の日本伝統文化の形成に果たした中国文化を中国文化一般ではなく、寧波士人文化として考察する視点を得ることになる。

３．研究の方法

本研究課題の分野は文献資料が乏しく、まず史料群の構築が第一となる。主要史料となる地方志は日本で閲覧できないもの、中国でも所蔵箇所が分散していて効率的な史料収集が不可能な場合が多く、近年ようやく整理が進んできたデータベースの購入によってその難点を克服した。しかしDBは依然高価であり限られた予算ではその一部を入手したにとどまる。また伝世・出土の墓誌を十二分に利用するため墓誌史料学の確立を目指さねばならない。さらに研究期間に重なりながら天一閣の登科録史料が影印刊行されることになり、それらを購入しつつ、従来の文献資料を補うものとして有効に利用した。分担者は各年度ごとに進捗状況を報告し、また研究協力者にも適宜加わってもらい計画を遂行した。

４．研究成果

北宋から南宋末にいたる明州士人社会の形成と確立を展望すると、北宋仁宗期の「慶暦五先生」など、主に清初の著作によって我々がイメージする明州先賢像は、南宋後半期の慶元士人社会が紡ぎだした自らの由来の物語であることが明らかとなる。ここに本研究課題は、明州士人社会の自己認識、いわば「記憶と記録およびその伝達」の問題を取り込むことになり、「慶暦五先生」像については、南宋後半 「慶暦五先生」言説の出現→宋末元初 王應麟による言説の定型化→元中期 袁桷『延祐四明志』による言説の定着→清初 『宋元学案』の言説流布という経緯を明らかにし得た。

宋末元初は既存文献史料の特に乏しい時期で、本課題に最も有効な史料は各種墓誌銘である。明州を代表する学者官僚黄震と王應麟の子孫には幸い墓誌銘が多く残され、それらの利用から元代慶元士人社会の一側面を窺うことができるのみならず、『玉海』や『黄氏日抄』など現在の研究に必須の重要文献の編纂・刊行過程を検証できたことも成果であった。しかし実は、これら当該時代の墓誌銘を歴史史料として扱うには未だ基本的な考察ができていない。これに対し本課題での史料構築の作業は、石刻史料の「同時間性」、「個別性」に加え、碑文などと異なる「存在の遍在性」という要素を加えて、歴史史料としての墓誌の有効性と限界を検討し、宋元墓誌史料学の基本項目を整理した。

その上で、近年刊行の『臨海墓誌集録』の出土墓誌南宋54件、元6件を分析の主要対象にして、台州臨海県という県レベルでの士人社会の姻戚関係や科挙への対応とその結果、そこから生ずる各家の盛衰を跡付けた。台州は、温州とともに明州を含む宋元期のSub Regionを構成していたというのが本課題でみえてきた結論であるが、鹿、応、王、陳、徐、朱、[呉]氏といった家同士の重層的な姻戚関係は、明州の名族間での様相と基を一にする。違いは、明州が『文集』などに収録される名族の墓誌からの帰結であるのに対し、臨海県は、それより下の県レベルの一般士人社会層であり、『文集』収録の墓誌は少なく、出土によって初めて明らかとなった部分が多い。寧波でも近年、いくつかの出土石刻資料目録が刊行されているが、題目に止まり録文のないものが大多数である。一日も早い現地での墓誌整理を希望する。

一方、寧波（元代には慶元路）の士人たちが元代の科挙とどのように関わったのかについては、まず色目人カルルクが多数存在する慶元路の政治・社会状況、および慶元路を中心とした元代における色目人の科挙対応について検討した。慶元路の進士合格者は5名、郷試合格者も延べ14名に止まったが、5名の進士中、3名がカルルクであった。カルルクの本貫南陽との比較やカルルク家系図の復元などを通して、南陽より科挙に有利な慶元の特質がみえてくる。その結論を踏まえ、カルルクなど色目人をも包含する慶元士人たちが持つ「科挙意識」について、次に考察を進めた。元代前期においては科挙が行われず、その中では科挙制度を客観的に評価する意見が見られるとともに、科挙以外のルートから官界入りを果たす現実的な対応がとられた。しかし、約四十年後の1313年に科挙開始が決定すると、慶元士人たちはすぐさまそれに対応した仕官を目指した。元代中期、科挙に登第したのは、宋代史氏の子孫など少数であったが、その背景には、宋代以来連続する「科挙をあるべきもの」とする士人に共通する一貫した意識の存在を確認できた。元代後期にいたっても科挙登第を目指す動きは継続するが、元代の政治の中枢においては科挙官僚が活躍する場面が限られていたこと、科挙のシステムが官吏登用制度に占める割合が相対的に小さかったことなどが原因となり、科挙を絶対無二と考える姿勢は時期を追うごとに小さくなっていったと考えられる。

以上から、宋代以来の「科挙意識」の継続を支えた中国の持続的な文化風土と、モンゴル政権による科挙の位置づけの間で、士人たちが試行錯誤しつつ現実的な対応をしていったことが明らかになる。同時に、彼らの科挙に対する持続的な関心が明代の科挙における慶元路の優位的な位置を生み出したことも指摘できよう。本研究を通して、元代慶元路が持つ特殊性をも加味した当地の士人社会の様相が輪郭を持って見えてきたと考えている。また、科挙以外の多様な出仕ルートは、南宋時の金代華北の特色でもあり、士人社会の様相は中国南方地域とは当然のことながら大きく異なった展開をみせた。

明代の科挙制度は、宋元の科挙制度を土台にして作り上げられ、その上での特質をもつ。本研究は、明代科挙を概観する作業の一環として、明代士人の朱子学的教養と科挙制度との関係を巡る考察に、まず取り組んだ。朱子学が科挙制度に取り込まれ官学化したことにより、士人達の読書の実態にどういう変化が生じたかという問題につき、明代士人文化に対する科挙制度の影響を実証レベルで考察できたと考える。また、明代寧波の科挙合格者データベース作成作業の一貫として、張朝瑞撰『皇明貢挙考』の資料価値について考察するとともに、北京図書館蔵『皇明浙士登科考』や各種題名録、及び地方志を利用してデータベース作成のための基礎作業を行い、これは継続中である。

2006年の『天一閣明代科挙選刊・登科録』刊行は、本課題にとり一大事件であった。これについては、前年から着手していた明・張朝瑞撰『皇明貢挙考』の資料価値についての考察が大いに役立つ。さらに、天一閣の創始者范欽と寧波士人社会との関係についての考察を進めるとともに、彼が各種科挙録を収集した動機やその文化的背景を探る研究の一環として、明代における状元文化をめぐる問題についても調査を開始した。加えて、明代寧波において進士を輩出し続けた宗族を抽出し、その社会的背景と文化的背景とについて考察した。また、『天一閣明代科挙選刊・登科録』『天一閣明代科挙選刊・会試録』の詳細な分析と、その蒐集者であった范欽と寧波士人社会との関係についての考察も継続しており、さらに、明代寧波の科挙文化と士人社会との関係について、状元という観点からアプローチすべく、『明状元図考』『皇明歴科状元録』『明三元考』等についての研究を現在行っている。

宋元明の寧波士人社会の通時的考察という当初掲げた最終目標に対して、現在の段階での回答は、明中期の豊坊の歴史的位置づけにある。「慶暦五先生」の一人、楼郁に受業し進士合格、高官を歴任した豊稷を祖とし、連綿と進士を輩出し続けた寧波豊氏の終着点が豊坊である。そのスケールと深さにおいて圧倒的な経書への造詣は、しかし豊稷以来の祖先の名に仮託した大量の偽経制作に費やされ、若き進士合格者は、奇行と破滅型人生の末、蘇州で野垂れ死にする。にもかかわらず当代を代表する書家としての名声は世を覆い、かれ一代で失われた万巻楼の蔵書は、一部が天一閣に帰したといわれる。

豊稷以降、坊に至る15代の系譜は、全祖望「天一閣蔵書記」の記述によって大筋が分かる。しかし仔細を考証すると、その系譜は決して一本で繋がっているわけではない。そこには江西九江から鄞県に帰還し、豊氏の伝統を復活した豊慶の存在を抜きにして豊坊への伝統の継承はあり得なかった。「記憶と記録の伝達」は、この慶によって再生成就されたと理解できる。

臨済宗妙智院住職策彦周良は、大内義隆が派遣

した勘合貿易船の副使として寧波に滞在、明の著名な文人からの序跋を希望し、江心承董との合作である城西聯句を日本から持参していた。豊坊の名声を聞き、その弟子であり交流のあった柯雨窓の紹介で序を求め入手する（日本重文）。次に正使として再度入明した策彦は、豊坊の家を訪れ、かれの号に因む「謙斎記」を贈られる。策彦が日本に将来した中国文人文化の粋は、宋以来の寧波士人社会の「伝統」の産物であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 34 件）

1　森田憲司　「可見元代石刻拓影目録稿・続（自至元 21 年至至元 31 年）」　『奈良大学総合研究所報』　無　18　2010　25 - 36

2　鶴成久章　「明代会試判巻標準考」『考試研究』無　6－1　2009　92－108

3　櫻井智美　「元代カルルクの仕官と科挙―慶元路を中心に―」　『明大アジア史論集』　無　13　2009　173－187

4　近藤一成　「黄震墓誌と王應麟墓道の語ること―宋元交替期の慶元士人社会―」『史滴』　無　30　2008　141－163

5　近藤一成　「鄞県知事王安石と明州士人社会」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』　無　53－4　2008　35－51

6　櫻井智美　「元代の北嶽廟祭祀とその遂行者たち」『中国石刻資料とその社会－北朝隋唐期を中心に－』　明治大学東洋史資料叢刊 4　無　2007　113－144

7　鶴成久章「明代の科挙制度と朱子学－体制教学化がもたらした学びの内実－」　『中国－社会と文化』22　有　2007　44－59

8　森田憲司　「系譜史料としての新出墓誌－臨海出土墓誌群を材料として－」『奈良史学』22　無　2007　53－78

9　近藤一成　「南宋地域社会の科挙と儒学－明州慶元府の場合－」『近世儒学研究の方法と課題』無　2006　187－206

〔学会発表〕（計７件）

1　近藤一成「明州慶元府士人社会的形成与発展―以豊氏為个案、従豊稷到豊坊」第五届科挙制度与科挙国際学術研討会　2009 年８月　北海道大学

2　鶴成久章「明代会試判巻標準考」第五届科挙制度与科挙国際学術研討会　2009 年８月　北海道大学

3　櫻井智美「元代慶元的士人社会与科挙」第五届科挙制度与科挙国際学術研討会　2009 年８月　北海道大学

4　近藤一成「従黄震墓誌和王應麟墓道談起－宋元転換期的慶元士人社会」中国南宋史国際学術研討会暨南宋定都臨安（杭州）870 周年紀念会　2008 年 10 月　杭州社会科学院

5　近藤一成「知鄞県王安石和明州士人社会」鄧廣銘教授百年誕辰国際学術研討会　2007 年３月　北京大学

6　近藤一成「従地域文化看唐宋変革―浙西湖州個案」唐宋社会変遷討論会　2006 年　台湾中央研究院歴史語言研究所

7 近藤一成「宋代科挙社会的形成－以明州慶元府為例」科挙制与科挙学国際学術研討会　2005 年９月　厦門大学

〔図書〕（計１　件）

1　近藤一成　汲古書院　『宋代中国科挙社会の研究』　2009 年　540 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

近藤　一成　KONDO KAZUNARI（北宋・南宋・総括）
　早稲田大学・文学学術院・教授
　研究者番号：90139501

(2)研究分担者

森田　憲司　MORITA KENNJI（元代石刻）
　奈良大学・文学部・教授
研究者番号：20131609

櫻井　智美　SAKURAI SATOMI（元代士人）
　明治大学・文学部・准教授
研究者番号：40386412

鶴成　久章　TURUNARI HISAAKI（明代）
　福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20294845

(4)研究協力者

飯山　知保　IIYAMA TOMOYASU（金代・華北地域）
　早稲田大学・文学学術院・助教
研究者番号：20549513